へ13
4415
4

N13
4415
4

端傾城賢気世之巻

目録

第一

粹よりも太を有やうの部分の評判

引くらさ金壱八六十銭ほどの値うち

咲後び十銭ほどあるさ枝ひざるまん

かみさ土産を勧ぬる肥後の埋所

〈2017-587〉

第二

千貫目と称する美術の画幅
数万両にいたるもの世界にあり
名づけ難きもの九軒の藩の上様なる侍
[illegible]

第三

[illegible]
作と八人一枚開帳の富士と数女の心
[illegible]

一

粹に成る土と成る廓話

大名の家や仲先の月儀のたるまでよりの生
国の名の出来始めの拡の[illegible]
六十余列とのこと迴国して[illegible]
もあまり見もなびくうるわしさ
がゆうありのあるじとそなふものこと
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

川　[illegible]川　[illegible]川　[illegible]

酒の肴
さうなもろ
ざーれ
三てさん
一つあり

まを
たんなハ
きれい
ずさ
ーや
だんな
ふりろを
そこへけろな
めバちゃのせいで
けそうすいふぶル
ーやてーや
梅をうゑ
石なをうゑる
而て大坂の町乃
おをゑ奇イ
おをゑ奇イ
ますす
肥後乃
ものすき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆるもうそうしゝ廉ゝの女郎ども
ゆゝしゝ大門のあくまでいと
信て門をうして酒のひるを
しゝよ祇園とらうとしゝ
うゝ地獄のさびしゝ
いろゝしゝれど女郎の
ゐもうしゝたうしゝ
雖彼のゐ里いまゞ
むしてめぐらうし
家見の風流いとゝ
天神二歩人遊て女郎の数三百百六十余人とい

の和七年の宝暦のゝ
十余年遊廓の
屋ゝ廉外遊屋九百軒
さく遊女の紙
も見ゝ京師の入口
くゝ高倉のめぐり
されがむるもそ
太のうちのゝ
も紙ゝ
屋ゝ
ゝ肥後の熊本

けるとぞいひうるこれのごとき編はあるべからずとも
為られが田舎にて生れしこの子の胞衣とは里の出
うぶめがそこなひ辨りまうしけり

二　千貫目を捨て花街の迴國

中村五十郎は顔髭と捨てんて一夜のいたりの
じくしいひけるこゝろくいづもも世帝のくるべきた
もとぐさんの後りのひうそてもあるべきの数すも
ぶどうの実をさへあれば十二の厄まぢもあれと
りうる事ものおもうんあもとづうしうれうは
大神とやくべきこと生しの言はさいて乃教者のなか
のさまもりしてもたるのい年しして市蔵の妻の

どりしゞり十数まして耳とひくありさまと意の
あの用ひうるれで玄米よりゆ辨れもとうるうすぞ
うるく中とふ弟しみといのあるべうりあれて
寝くもうきをもくそれうあるるとの女帝と
女六七ようれいいふるいのやうよいふうるる
ひと九をゆふあの中三郎と世りわふもあり一編
うあて命とうしあるうう結の沢れたくれと女帝よ
ふとどうまうう町人の家と稽にあうとれあるやた
まけるれど一にうのいはまうもあてはあとと家の人が
いううるとうとうしあ女帝雲ってうと雲のあり法ひり
たうしうの西産ありしうるいりのくとに

戸のうちにかくしおくこと世八万石の内の
一つとなれり十九の年あつ親死たるの初首領の名九十
貫目ありしを判形をつくりあんをもかへて
ぬすみとりたる不埒文ぬけ勝手をあらひ
しるうくまもるくゆうりょうの身祥ぬきつ
してもこれをゆるしことごとくぐくと一門をあつ
めせんゆとくうれをとくぐくうれ野風俗のあとあ
鶏頭のあぐれらひ勢のつくひまを色よいあり廉屋
の新妻さらぐさ新しと言のたのしこあるりこうぐら
ものしらももの人の人を思つぐ思もうれとたのあ
よりりへだてとし白状ぬ帝ぐらひとゆあいあそ

むこのようとあそびかたをしてくらしをるうちに
ばけんへいげのごとくこうらびれそれより男うた
かたむきかるもの　世情よみてこゝに年月をへて後月況
の判形いくつのぐるぐりのあらためをかへ
とんぢやぢやの下屋敷よりあて下寺町の隠れの金
も芝居のたべれたのくめもいづもこいとうあそこ
まあそびさりとうやうてもくるしかるべき男
もしらとるをうちあるこゝろとがりて深えんをかの帝
ぐらいこゝもといとうとうかんぢやらかの帝ぐらひ仕ぐらた
けう方のあるはあるまいいくらも遊ばんともあだ
う男ようとのふ夫の男んといひつのらんいそれぐれのの

あそびかたをしてくらしをるうちのあんなまでらのくるのの
ものあるはとりもちのようめやうよりへばるをうら
もまれうつしてるるべにいとうあるべりとこゝ
ちあるまでにいるの百姓はうんぐうんけはれ
慶ようのようりのもくんまくのにあるべしてあそこ
うらんあさまりやう遊ばりよりはこうるくとりるる
やりよござるもし芸子者がいあるべとりひやうる志ん
ちいうるくるくるく

かんせいげつくるまたらうこれ三月彼岸より八月末来
の月ばかりまで一日もれずあへばそれより又あとへ
てあづまの方のびてうあり風信ゆゑ〜と沼をとりて
いと千住はれ成ばかりあり宿とりて三浦屋のこもり
さるよりそまりて、ひとしこめることとりどりて家に
年とりあらば二月よりあたらしきれば成れば
ちと白りよりあれ新吉原してしてこれいと海のうち
ばうとしいろくいるくみてすもうびよりあてゆくか
ばりよりたくんりうこの一義のこりはれ牧
濱の屋の張三郎平右衛門の一行相宅部の古今はこ
あに彼りしこの具をあ義義入より宿りよりは

しらべ張七八貫目ばかりをいまこの宅宅の贈りよりいまこの
宅相りよりあり張女三貫に百貫ばかりあつめてれ
ばまこのこうりよりみたくれとめとこの元年より又吉
あやりみそまりよりひとそれとありて彼の張ばかりと
よりあるかりたのありのこうりと居りとたばば
此張彼ばあるもの元彼見たよりたべの方と相てそこれ
くまりれ相のまのトよりの張入るどりの居とむすび
新吉よりと耳とあづけてあるこの張りすてこ〜けるが
家ばかりの張本町よりこうふ男よりこうりれて相みと
見こたりしり張彼ばりすてたまよりの肥こう麻
こと彼べ神しくりこうりこまでこりこと

たつあるよし和もとりしづくそしてこの大坂よりそれがむ
しの友とかたりよりそうり男一人つうそうして一代やし
ゐひとりのびしいとりのいくたりもあれどそれも
そうのうのまねおもし親のゆりあけてよ世間
のあれとうどうさこ年りよりしゐるれこゑまこうら
したるか世一のなこそどの浜ゆう年とあしこれし
ためしどうこうさまどうもけのあゆのくゆいろうれ
ありてもうとうこうもしねばけうこうもの行儒りよあるう
ゐこうの店りてそこれ兵一人とあせてたうるべ
しこれこそも仮業商売のにせ居りるべけうの
ぬしこれなどのるいこれどう自分ようせざやしこう人

だこれこそそうくのうと九歩の藻のう人よ二万に
のおをうりて儲一ヶ月業商売にいけのよりくこうゐる
ものそ面一初かりてよりいとうのこのふくを板よ去
儒りて半ばり　一色屋婚精数　代ヶ十八文
一倍もこぐたり代ヶ月文　一糠よるる代数　代ヶ十八文
せよいめりり紀かんそ多りとそ美人ヶ月やして永ゐる
よ婚精数ちいそ紀算盤ゐり見をたりいて源氏物よ
りやけて墨面ひるびしとのの切紙ゐれくさりハるくおく
のいろ墨よ流乃はさくやくよるるとほれ人ゐうびは一夜
まのたち数とのどりとそのむびしをさめくのあはて男ゐる
おうるくは恋むうのうこん久茶伊のまご名の出あうちの

おひが粹ありそうく廓の張ひまるる事ハ歴史のやう
でる実の粹それいうよといくばすといとれると脱代か
ゆうむと一時ゑれバやたりふまいの内かををそふのぐ
やうたり粹のきろをひるりとぞ

三　源蘭をさくかざまを旅しる表紙

別粹十人藝の町人ら妙子の生れし附それぐ
嫌入の遣用れんあそよ張ふ三夏目のけそをけば
すまちかよて嫌よはける附のこ〜ら人りのそ月るま
紫ぬつりそう別子のうまれし附それぐ粹人乃
ほいを粹のつるひ張とて夏夏目のけそおいうとも
それハはりの志れ物ふ志ふり天祢ハころ

ゆゑとく廉えらり分の女命のおれど沙汰
まして云問てつ男ばるる孫の代まで流るつくるもと
なりへばらと花ていとこの貴こ紀の家代の家こと長崎
の窓のまへよ書とりひりげ家と濡で来ととり
巣学よ巣竹乃池畑よ貝とうんゆ〜温ばる家
本れ枕もらこ孫数ば梁の縄よあと懸〜紙門
のたよ男ばらづひしもあらんれ姫のもれ境
ようとあ〜ゆとりへ廉深の敷吹
海よ二日弾のうあるとうさくりの兵衛の
女の朝れまみよ日紙の潤とたの〜こ乾晨乃々
のおりひと行弁よ〜ら門と出ぶ〜と寿里よ

あゆむんの孫のまれ縄ハゆるれとも塩尾れあうり
へいいるみ〜ゆとしけどと主一不適のうん宿よ一紙
とうこ尾あのりこうひ内さんりくもるさるれ
どうとのむ月りあらんだ時い毛男の屋男と
えりりりと友加ばうこるもみの最乃紙あるる
るいまぐうけ孫〜んと席ともくれどるる
秋新紙とのか先氏毛とうのかるせっまし
時あふぐやのりてうこ廉遅暑の家
やりたるあのみ〜人まてけの下
孫〜ちこれこらもりのさづ美
御ふ濡と祇毛月の時あとのこいつうりのるこ物

よしてそこれいこころみるこの老男或者の男子より
光者の如くなり聖法をよへばうたがはまつて御佛
とるなら西海道の白箭といふものと牧見つる女
ばりなれどこの水松の猿姿なり陶魔王の判
ことおが母とりのとられどこ〳〵屋の作儀ゑ墓の
儀の茅部しるこうみ佛のゆうへまことにいのこと
老ゆうたさるくるの白人此女命に毎年嬰子と誕
生をるくるゆいたしても名点のゆうめるし女命
ゆい猿れ者つけうういうゆいうゆいうゆ
ゆこことわれ者ゆいうゆいしとい
かまけもくゆ死よみれ猿生ハやき

嬰子年仲ゲ入しくくして敬とといいさうゆうれ
色のまゆくとりいるゆうじむよゆうてあらゆうくて
けゆうれたとくてたらうくさりの男女の中と清か潔
ゲかけうれ知ゆうあのまゆうてい猿さうゆうりのと鯉
月制関も寄のけもうれ見もやうゆ女命
あれどゆうゆうくとゆうていたなどのゆうくとに
うくいろへうくゆうゆうどうくもいうれゆいまい
せんうくゆうり

ゆれまを探ゆうゆうもいうどかう

たゑ人ゆうゆうゆうして猿ゆうゆうさいりて志くゆ
くくゆうれくいゆを人ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうて

物もらいさうに絵てるじゃくとのくるあ八しくあるりあと
るいやうりの月人せうけこうりも親孫しゆ判い鼓美ゑ
八の屋やしまと安い櫻孫のらぐまてうのやしまう
めうかして居らくあ命もそのまのい坪間と
せうり孫の去うけしてもしひなまとんぐまうまの
うしかもうくかまの人くしまの物れわ孫こるうり
くれうんじの答りう
答まぞ孫よ和年敬をやたづぬん
うのしの耳はいしわぐろいつぐうのうの火まし
もるもありまうけて病うも家のしけゆくう
さうんいづくの墓れよ人の鼓やく眞そ遠答の

風はさうそうれまれが友加もうのしとやめて緑
答年と親むるうかつさげゆく加答幻の世にうふ
うく人のあれうへあもい毒月の乳出の孫答りもうば
そもとおりへば海ゲのまれわといふをそぐるう命さ
こしわして友かれありうあうれゲんをる兵今の
かや蓑乃眞よいわしゲまうこうの孫うしく鬱背
ゲ火孫へおりてこげうみありひぞといひしうけふく
吋乃傾塀の工作うく坪りふ年くまく

井